

大人の散歩道

東京都・中野区

空襲の記憶を後世に伝える遺構たち

現在の成願寺の山門（上）と、境内（下）

交通の利便性が高く、暮らしやすい環境が整った東京都・中野区。サブカルチャーの聖地ともいわれ、多くの人が集まっている。今回は、そんな中野区内で、戦時中に使われた防空壕（以下：旧防空壕）が残る「多宝山成願寺（以下：成願寺）」と、その周辺の遺構を訪れた。

旧防空壕内で当時を体験

東京メトロ丸ノ内線・都営地下鉄大江戸線中野坂上駅から徒歩三分。竜宮城を想像させるような立派な山門が現れる。目的地の成願寺は、室町時代の一四三八年に開創された長い歴史を持つ寺である。

広く美しい境内の隅には、「旧防空壕」が眠っている。細い通路を抜け、扉を開けて中に入ると、雰囲気が一変。やけに静かで重々しさを感じた。

初めに目に入るのは、奥行き約四〇メートル、高さ・幅約二メートルのジグザグとした通路。通路の先はもう一つの出口とつながっており、トンネルのような形状になっている。これらは、爆風を通しづらく、こもらないようにする工夫だ。

さらに、通路の脇には、五畳ほどの小部屋。かつては、この小部屋も三つあり、風呂やトイレも備えていたそう。筆者のイメージする防空壕は、地下に掘られた狭い空間だったので、旧防空壕の大



成願寺の旧防空壕

別掲 旧防空壕の見学

電話：03-3372-2711

見学可能日時：

月・金・土・日

9：00～11：30、

13：00～16：00

(要予約)



◀成願寺
公式HP

旧防空壕は土製のため、約二五年前に崩壊の危機を迎えていた。住職の小林貢人さんは、この時、「戦争の記憶を後世に伝えたい」と補強工事を計画。安全に見学で

継承することの難しさ

電気消してもらうと、昼時にもかかわらず、一メートル先も見えない。この暗闇の中で、空襲が終わるまで身を潜めていなければならぬとは、どんなに怖くて心細かっただろうか。想像するだけで胸が痛い。

きさと工夫に驚いた。
見学時は電気がついていていたが、当時は明るい場所は敵の標的になってしまったため、もちろん真っ暗。

きるよう、天井や壁面を鉄板等で覆い、照明設備をつけて、床には砂利を敷き、トンネルの両端には扉を設置した。

現在、近隣の小中学生が見学するほか、一般見学も受け入れており、戦争の記憶を幅広く後世に伝えていく。皆さんにもぜひ足を運んでほしい（見学には電話での事前予約が必要のため、別掲をご確認いただきたい）。

旧防空壕を見学した後、副住職の小林要介さんに、戦時中の成願寺の資料は残されているのかを聞いてみた。

成願寺は、一九四五年の「山の手空襲」で全焼し、旧防空壕に避難させたご本尊や一部の書物以外は焼失したため、当時の記録がないとのこと。

当時の成願寺を知る人が高齢化する中、戦争の記憶が風化することを恐れ、『成願寺 今昔あれこれ』という冊子を作成したそうだ。ここでも、戦争体験の継承の難しさと大切さを痛感した。



▲境内の隅に眠る旧防空壕への入り口。補強工事で扉をつけた

▶通路の脇にある5畳ほどの小部屋。かつてはここに仏像等を避難させていた。



寺 ▶二〇二一年に発行された『成願寺 今昔あれこれ』



◀通路の鉄板の合間には、複数の四角い小さい穴が。当初はここに仏像を安置する計画があったが、土がもろいことに加え、湿度等による腐敗が心配されたため、現在は使われていない

もう戦争は経験したくない

戦争を体験した住職の小林貢人さんは、高齢のため、現在は直接話をすることが難しいとのこと。そこで、『成願寺 今昔あれこれ』から小林さんの戦争体験談を一部抜粋した。

「昭和二十年の一月十九日、私は調布にあるお寺に住んでいました。今は住宅地ですが、当時は純農村でした。北方に中島飛行機の工場、西に調布飛行場、東には高射砲陣地・電波隊基地もあり真昼と真夜中に爆撃がある。高射砲というのはわかりますか。(中略) この弾が上で爆発しないで、私のハメートル前に落っこって爆発した。幸いに住人一同怪我なしでしたが、四寸(十二センチ)角の柱に穴が空いているのを見てから、気を失うように座りこみました。」(三五ページ)

「昭和二十年五月二十四日夜(二十五日山の手大空襲は、三

月十日隅田川方面大空襲に次ぐ大規模なものでした。調布から見ると、東の空いっぱい明るく茜色の雲が層を成し、火花が舞い上がるのです。時の住持長谷川孝善大和尚―義堯大和尚の師匠(注)を案じ、父は朝一番に駆けつけ無事を確認、しかし成願寺すべて灰燼と化し、骨だけの焼死体が境内に三つあったそうです。」(五四～五五ページ)

「(前略)迎えた八月十五日。父義堯は朝早くから玄關の間を片付け、ラジオを高いところに据えた。十一時半、父は家族、疎開学童、職員五十余人に整列を命じ、大声をかける。『これから大事な放送がある。畏れ多くも陛下のお言葉だ。直立不動しっかり聞け』……それは『終戦詔勅』だった。……(中略)中学から伝令があり、十七日朝、二重橋前に集合。『天皇陛下申し訳ありません、私たち努力不足でした』と敬礼したのです。」(五五ページ)

(注) 当時の成願寺の住職



◀「石棒さま」は、空襲によって破壊され、焼けただれた庚申塔を、戦後まもなく、地元の人々が崩れ落ちた石片を集めてセメントで固めたもの。修復後、石の棒のようになったことから、「石棒さま」と呼ばれるようになった



▶戦禍をくぐり抜けた「布袋様」。戦後、地元の人々が破損箇所を修理し、表面を茶色の塗料を塗って修復した。優しい笑顔で今も地元の人々の幸福と平和を見守っている



『成願寺 今昔あれこれ』には、小林貢人さん以外にも、六人の檀家の戦争体験談等が掲載されている。旧防空壕を見学した人に配布されている。こちらあわせて見てほしい。

最後に、副住職の小林要介さんが、「たとえばどんなに小さくても、一人ひとりが周りを敬う『慈愛の心』を持つことが大切です。『慈愛の心』が積み重なることが、戦争を起こさないことにつながるはずです」と語ってくれた。

当時を風化させないために

成願寺に壊滅的な被害を与え、中野区内の大半を焼け野原にした山の手大空襲。

中野区内で正式に確認されただけでも、死者四一人、負傷者一六一人、全焼家屋二万七〇七戸という甚大な被害を及ぼした。区内には、成願寺の旧防空壕以外にも、当時を風化させないために、遺構が残されている。

中でも、写真の「石棒さま」「布袋様」は、空襲で破損したものを、

地元の人が修復し再び奉ったという。

現在も、地元の人々がいていねいに手入れをしているのだろうか。お供え物や花が置いてあった。平和を思う気持ちを忘れないように、そして、「石棒さま」や「布袋様」が、もう二度と戦争で破損しないように、願いを込めて手を合わせた。

中野坂上駅や成願寺から、徒歩圏内に位置するため、皆さんもぜひ足を運んでいただきたい。

都会の中野区にひっそりとたたずみながらも、戦争の悲惨さを伝える遺構たち。もし、皆さんの地域にも残されていれば、一度足を止めて、当時に思いをはせてほしい。

「新しい戦前」ともいわれる今、「慈愛の心」を持ちながら、歴史を正しく振り返り、平和への声を上げることが求められているのではないか。

もう二度と、戦争で防空壕に逃げ人がいなくなるように。